

移動する文化財



写真2 現在の石造物
(2010年9月撮影)



写真1 住宅にあった時の石造物
(卜部行弘氏 2004年10月撮影)



土浦市立博物館長
茨城大学名誉教授

茂木雅博

昨年は平城京遷都1300年を記念して奈良県を中心に多くのイベントが行われ、歴史に関心のある人々には楽しい1年であったと思います。私は奈良県立橿原考古学研究所の所員でもあるので所長の希望で千葉と土浦で1年間記念の講座を開講しました。土浦では館長講座を「明日香の遺跡」と題して10回にわたり、わが国の古代都市の考古学的様相を紹介させていただきました。結構好評で毎回30人前後の市民に受講していただきました。また恒例となりました野外見学会は秋に桜川流域の遺跡や史跡巡りを実施しましたが、これもバスが満席であり、3年目に入り参加者がこうしたイベントに慣れてきた事が私としては大変うれしく思います。どうぞ歴史に関心のある市民の皆さま、お気軽に博物館へ足を運んで

下さい。博物館は皆さまの知的好奇心を少しでも満足させる事が出来るよう、職員一同日々研鑽してお待ちしております。さて今回は少し変わった視点で文化財を紹介したいと思います。ここに土浦市乙戸南のある住宅の庭石として置かれていた1枚の写真を紹介します。(写真1)

この石造物は報告によりますと「花崗岩製の転石を使用して作られており、形は裸体の直立体で人間の様でもあり、或は別の動物の様でもある。高さは約60センチメートル、肩幅43センチメートル、最大幅は脚部下端で54センチメートル、厚さは腹部が最大で28センチメートルである。特に腕と鞞丸の表現が注目される。腕は上腕から前腕にかけて側面に細長く削り出され、体部と不均衡である。また右・左表現を異にしている。下腹部には鞞丸と男根が彫られているが、男根が鞞丸に比べて極端に小さい(注1)とあります。最後に報告は「石造物は男根を露出する裸体の動物あるいは人物を表現したもので、飛鳥の猿石に共通するモチーフである」としながらも真偽の決定をさけています。

しかし、この石造物はもう土浦にはありません。所有者は2005年春に奈良県立橿原考古学研究所へ寄贈され、現在は研究所の収蔵庫に保管されています。(写真2)

文化財保護法という文化財には動産と不動産があります。不動産は遺跡で地下或は地上に固定されているものですが、動産は遺物だけではな



写真3-2 吉備媛墓の猿石



写真3-1 吉備媛墓の猿石



挿図 修陵前の欽明天皇陵

く解体されて移動が可能なものも含まれていきます。例えば大津市三井寺の三重塔は吉野寺に創建され、秀吉によって伏見城に移され、家康が近江商人に下賜して現在三井寺に建っています。或は下妻市大宝八幡神社の梵鐘には武蔵國平林寺の為に鑄造されたという銘文が見られます。これ等にはそれぞれ深い歴史が刻みこまれています。乙戸南の石造物には大変重要な歴史が刻みこまれています。それはどんな歴史なのか、私の調査した事を紹介させていただきます。

この石造物は江戸時代に徳川光圀が古代天皇陵の探索を要求した事により、幕府は初代神武天皇陵から102代後花園天皇(1428~1464)陵までの実態調査を実施しました。その時に元禄15(1702)年29代欽明天皇陵として梅山古墳が治定されました。梅山古墳はそれまで檜前村の常民の庚申信仰のための塚として利用され、当時の絵図には前方後円墳の裾部に猿の石造物が4点程集められております(挿図の円内)。天皇陵に治定されると一般人の立ち入りが制限されたために、この石造物は一端墳丘外に撤去され濠の外に野積にされていたといえます。この古墳はその後、宇都宮藩の修陵により、濠の底を浚渫して周囲を整備し、前方部前面に吉備媛墓が整備されその裾に4体の石像が猿石と呼ばれて置かれています。(写真3)

飛鳥時代、特に斉明天皇(655~661)は飛鳥石と呼称される角閃石黒雲母石英閃緑岩を使用した多くの石造物を残しています。また奈良盆地には多くの寺院が建立され、礎石等が露呈しています。こうした石造物は平安時代以降放置され、近代以降には、廃仏毀釈の対象となったり、石垣等に転用されて運びだされる事が多く、例えば若草伽藍の塔心礎、明日香村出水の岩船、山田寺の礎石等が換金されて持ち去られ、東大寺境内の多くの礎石は大仏殿改修の際に石垣に転用されています。

乙戸南の石造物は欽明天皇陵に治定された梅山古墳に存在したと伝承され、いつの時期か滋賀県大津市の個人宅の庭石として買い取られました。それが近年になって京都北白川の石造美術商「石源」に引き取られ、1971年9月芦屋市の浦辺鎮太郎氏に買い取られました。この石造物はその後御子息に譲られ土浦に運ばれたといえます。そして浦辺氏の東京転勤によって、この伝承から氏は奈良へ返すのが最良と考え、奈良県立橿原考古学研究所へ寄贈されました。現在この資料は研究所の収蔵庫に収納されていますが、その遍歴はどのようなものであったのでしょうか。何れにせよ土浦まで旅をしたこの文化財は、元の鞘に戻ったといえ

るでしょう。しかしこの石造物が確かに土浦に一時存在した事は事実であり、そのことを記録して置きたいと今回紹介しました。もしも読者の皆さまの中で明日香村を訪ね、欽明天皇陵に治定されている梅山古墳に隣接する吉備媛墓の裾に並ぶ猿石と称する石造物を見学する機会がありましたら、もう一つが誰かに持ち去られ、明日香―大津―芦屋―土浦―橿原と旅をした奇妙な石像があつたかも知れないと思いだしてください。最後に私は元所有者浦辺徹郎氏の行為に心から敬意を表し拍手を送りたいと思います。

なお、今回の報告にあたり現所有者である奈良県立橿原考古学研究所の木下亘、卜部行弘、千賀久氏には大変お世話になり、卜部氏には写真の提供を受けたことを銘記して御礼申し上げます。

(注1)木下亘・卜部行弘・奥山誠義・奥田尚・浦辺徹郎氏寄贈石造物 調査報告『青陵』第130号 奈良県立橿原考古学研究所 2010年7月。

